

幼児に聞かせる話

一 保 姆

昔ばなし

昔おとの様のところへ染物の大層上手な染物屋さんがまゐりました。私はどんなめんどうないろでもお染めいたしますからどうぞお云ひ付け下さい」と申しました。するとおとの様はむづかしそうに染物をいろ／＼お考へになりまして、「それでは笛と太鼓の音いろを染め出してくれ」と仰しやいました。染物屋さんは一吋こまゝりしましたものゝ、始めにどんな面倒ないろでもお染めいたしますからと申上げたのですから、

「はいかしこまりました。」と御殿からおうちへ歸つてまゐりました。それからこの染物やさんは夜もろく／＼ねないで考へました。いろ／＼考へたすゑ大きなお日様の下に槍を一本そへた模様を染めまして大よろこびで御殿へもつてまゐりました。おとの様は染物屋のもつてまゐりました染物を受取りになりましたと云んなに笛と太鼓の音いろを染め出しただらうと云ひつけたものゝなか／＼むづかしい事だとお考へになりながらその染物をおひろげになりました。それには大

きなち日様と槍とが染めてありました。おとの様は、

「これはち日様と槍ではないか、どうしてこれが太鼓と笛の音色であるか。」

とおきくになりました。染物やさんは、

「はいち日様と槍でひやりく〜でそれは笛の音いろでござります。」

「それでは太鼓の音は何とする。」

とおつしやいました。染物やさんは、

「はいち日様とやりで天つく〜でそれは太鼓の音いろでござります。」

と申し上げました。

おとの様もこの惻好な染物やさんには感心なさいましたしと澤山の御褒美を下さいました。

龜の子のはなし

ぼかく〜あたゝかい日に太郎さんは海邊で遊ん

で居ました。すると岩の下から黒い大きなものがのそり〜と出てきました、太郎さんは一寸びつくりしましたが、すぐあゝ龜の子だとわかると安心して、その龜の子がどこへはつてゆくか一生懸命に見ておました。すると又一匹又一匹又一匹又一匹と數へきれないほど澤山の龜の子がはひ出します。大きいのもあれば小さいのもあります、太郎さんは今までこんな澤山の龜の子を見たことがありませんので、うれしくつてうれしくつてたまりません、いつのまにか太郎さんは龜の子もしろい、龜の子もしろいとあどり出しました。一生懸命に太郎さんがあどり出してゐるうちに龜の子の足をふみました。

「あいたたあいたた」

と大きな聲を出しましたので、太郎さんはあゝこの龜の子はものが云へるのかとあどろいて、

「もし〜龜さん、私はこんなに澤山な龜の子を

見た事がない、おもしろくて／＼おどつてゐるうちにあなたの足をふんでごめんなさい。」とあやまりました、龜の子は太郎さんのおどりがあまりおもしろいので、だん／＼太郎さんに近づいて太郎さんに足をふまれたのです。龜の子は、「わるいのは私ですよ、あなたのおどりが面白いのであまりそばへよつたんですもの。」と云ひました。

「さあ／＼私たちも太郎さんと一緒におどりませう。」

澤山の龜の子はつぎ／＼とおどり出しました。

大勢の龜の子は大よろこびで手も足も出来るだけ澤山にのばしておどり出しました。

そのうちの一匹の龜の子は、あまりおどりすぎですつかりからだか龜の甲良から外へとび出してしまひました。太郎さんをはじめ外の龜の子たちはびつくりしました。甲良からとび出した龜もさ

ぞおどろいた事でせう。大急ぎでもとの甲良へ入らうと思つてさかしまに入つてしまひました。頭を尾の方へ入れてしまつたものですから、苦しくて／＼たまりません。頭の出るところがないのですもの、そばに見てゐた太郎さんや他の龜の子たちはおどろいて、龜の尾をもつて後へひつぱり出しました。そして今度はちやんと甲良の後の方から上手に頭を出すことが出来ました。